
Fate/Fade

華漢羅韋墮亞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e / F a d e

【Nコード】

N 6 7 8 0 H

【作者名】

華漢羅韋墮亞

【あらすじ】

再開された聖杯戦争。蠢く宝石翁の陰謀。その影に潜む悪魔の使者。そして、10年の時を経て邂逅する、剣製の術者。
この日、運命が動き出す。

0・『ムカシバナシ』（前書き）

この小説はFateを主とする型月作品にオリジナル要素を追加したファンフィクションとなっております。さらには、著しい原作キヤラ崩壊や意味不明なセリフ回しを主成分とする混沌小説でもありません。その手の読み物に嫌悪感を示される方にはブラウザバックが小吉です。また、これが初の投稿小説、つまりド素人の作品です。で、「オク、バッチコーイ」と言う方も余り期待せずにご覧ください。でわ。

0 ・ 『ムカシバナシ』

風が吹いた。

冷たく肌を貫いていく。

季節は冬。 処の記憶は無い。

枯れかけた、活力の残像。

この日、オレは確かに、家を捨てた。

寒イ

寒イ

寒サナンテ、初メテ知ツタ

辛イ

辛イ

辛クナンテナイ、怖クナンカナイ

我慢シナキヤ、イケナイ

ダツテわたしハ、ソウイウ【物】

何時デモ何処デモ独リキリ

コツチデモ、モトイタトコロデモ

わたしは独りダッタ

ズット、独りダッタ

晴天。

目線を上げれば、そこには雲ひとつない蒼穹。

太陽は眩しく、左手に広がる河川の流れや、踏みしめるアスファルトを焦がしていく。

「シロウ、大丈夫ですか？」

平和な午後の昼下がりに。

あと数日もすれば、その光景とはまるで正反対のゴタゴタに、主にシュバインオーグさん家のゼルレッチくんとかの所為で巻き込まれるコトになるのだが、そんな事など小指の甘皮ほども知らない我がセイバーさんのメシ使い。

坂の上の武家屋敷、衛宮邸とお隣に控えまする腹ペコ騎士王の主「マスター」、衛宮士郎は、溜まりに溜まった鬱憤を吐き出すかのように、大きな大きなクシャミをひとつ、春の大空に発射した。

「ああ、大丈夫。なんか、最近よくでるんだ、クシャミ」

「……それは大丈夫とは言わないのでは？」

いや、まったくもってそのとおりだ。

でも実際、熱もなければ体がダルい訳でもなく。

季節外れの風邪なんてことはまず無い感じで、でも自分の性格を鑑みるになんか信用に欠けるのだが、取り敢えず俺は今日も健康優良児。

しかし、お隣さんは納得いかない様子。

今も両手を後ろで組みつつ、半分ジト目で睨んできている。

それが妙に可愛らしく感じてしまうのは、不謹慎というやつなのだろうか。

「シロウ、どうしたのですか？」

純白のブラウス。濃紺のスカート。透き通るような白い肌。新緑の瞳。

こうして見れば、確認するまでもなくセイバーは女の子だ。

非の打ち所なんて何処にもありはしない、綺麗な女の子。

出会った当初は違った。なんてことはそれこそ小指の甘皮ほどもない。

月明かりに濡れた金砂の髪。

紗蘭「シャラン」と音をたて舞い降りた。

剣のような真っ直ぐな瞳。

その新緑に灯された覚悟と、秘められた悔恨。

『問おう』

『

……たとえ地獄に堕ちようが思い出せる。

『 貴方が、私のマスターか』

あの日、初めて会ったあの夜から、俺はこの少女に惚れていたんだろっ。

「シロウ？」

だから、こんなにも眩しい日々。

具現する筈のない未来を、彼女は最後に手に入れた。

王の道を選んだ少女。

みんなのために、人間であることを捨てて、その果てに裏切られた少女。

存在の証すら捨て去って、ただみんなのために、時間と空間を越えて戦い続けた少女。

みんなの笑顔を守ろうとして、その笑顔を忘れてしまった少女。

……それでも、最後に、あの夜明けの丘で。

『 シロウ 』

最後の最後で、自分のために笑ってくれた彼女。

『 貴方を 』

……だから、こんなにも眩しい日々。

本来共有する筈のない日常「セカイ」。生きた時代も社会も違う。

決して出会うはずのなかった俺の事を、俺のいるこの場所を、彼女は選んでくれた。

これは最良の運命。

「いいですかシロウ。風邪というのは引きはじめが肝心なので、いま体調に問題がないからといって油断していると後々」

鈴を転がすような声は少しだけいつもよりトーンが低い。我が家の風紀委員長の、もう定番になりつつあるお説教。

今はそれすら微笑ましく思う。

「シロウ！聞いているのですか？」

「聞いているよ。だから大丈夫だって、風邪じゃないよ、これ。ただクシャミが時々出てくるくらいで」

「それを、風邪というのは？」

違くない。

そうだな、いつも心配かけてたんだ。たまには自分の事にも気を使
つてみるか。

そんな事を、晴天の下で思っていた。

聖杯戦争。

それは神降ろしの儀式。

降臨する7つの伝説を駆る、7人の神秘の織り手。

ここ、冬木市で半世紀毎に行われてきた魔道大会。

血を血で洗い、己が最強を証明し、万能の願望機たる聖なる杯を奪いあう無差別殺戮「バトルロイヤル」。

神秘に携わるならば知らぬ者無き、現代魔道史最高峰の戦争「イストリゲーム」だ。

起源は約200年前。始まりの御三家によって試みられた聖杯降霊の大儀式。其の所有権を巡る争いに、端を発する。

参加資格は二つ。神秘を繰り操る存在、所謂”魔術師”の能力を所持すること。

その手に、選ばれし聖痕を所持すること。

魔術師はその聖痕を以て、伝説の英雄を今世に召喚し。

使い魔とする。

此こそが”サーヴァント”。精霊にまで押し上げられた偉人の御霊。聖杯戦争における魔術師たちの切札。

剣の英霊「クラス・セイバー」。

槍の英霊「クラス・ランサー」。

弓の英霊「クラス・アーチャー」。

導師の英霊「クラス・キャスター」。

騎兵の英霊「クラス・ライダー」。

隠密の英霊「クラス・アサシン」。

狂人の英霊「クラス・バーサーカー」。

計七種類、一種につき一体の英雄。一人の魔術師「マスター」につ

き、サーヴァントは一体まで。

七人のマスターが七体のサーヴァントを揃えた瞬間、戦争の名を借りた殺しあいが始まる。

……だが、それも今となっては、ただの逸話。

戦争は終わった。

これは今となっては、ただの逸話なのだ。だらだらと書き連ねるこの記録も、私なりの未練なのかもしれない。

私は脱落者だ。

いや、それを言うなら、あの戦いは参加した全員が敗北者だ。

戦争は終わった。

勝者なき結末。

聖杯は、破壊された。

第五次聖杯戦争。最後の戦いにして、最高難易度を誇った、たった
5ヶ月前の、あの戦い。

その勝者、エミヤシロウの手によって。

遠坂第六代の手記より

打たれ、軋んだ骨の痕。

裂かれ、開いた肉の花。

零れた血液の海。幾重に重なる死骸の山脈。

其処には、何十万というヒトガタが窪んだ瞳で天を仰いでいた。

老若男女の如何を問わず、無造作に築かれた骸の塔。

全ての死体が例外なく真上を向き、全ての死体に例外なく”両眼が無い”。それは、奇妙な惨殺現場だった。

天を仰ぐ窪んだ瞳。最早、光が宿ることは永遠にない。

欠け落ちた死体のカタコンベ。

その頂点に、黑白の野獣は君臨していた。

「……………八」

両手を掲げる。

そこから滴った赤黒いモノは、地面に吸われることはない。絨毯のように、辺り一面に敷き詰められたアレが、退いてくれない限りは。

腕から。

脚まで。

腰から。

脳天まで。

口元には、なにかピンク色の欠片がこびりついている。

夕焼けの中でもなお紅く、彼の全身は朱に染まっていて、羽織ったコートだけが薄く、淡く輝いた。

その足下には、やはり残骸が山積みになれ。

(ツ)

そんなものではない。

彼はそんな生易しい怪物ではない。

蹂躪する様は天災の域。

幽霊が、日の光を受けられぬように。人間はどれだけ常人離れしようとして、自然災害には敵わない。

さっきまでの殺人は、そういう類のモノだった。

カタ カタ カタ カタ

笑いだす膝を、爪を立てる事で抑えつける。未だに、彼の戦い方には慣れない。

普段の温厚さとのギャップも手伝って、どうしてもあの姿を視るたびに一瞬震えが奔る。

「……………あ」

気がつけば、目の前に彼の姿がない。

ふと町の入口を見れば、既に小指ほどの大きさになった彼の姿。どうやら、また置いて行かれてしまったらしい。

（　　いつまでも怯えてはいられない）

ああ、そうだ。一度憑いていくと決めたのだ。今更怯えてなどいられない。

怖がってなどいられない。

確かに、足の震えは未だ止まないが。

「それでも、ワタシは決めたのだから」

「ん？」

「オーイ、どした？なに固まってんのよ？」

「ツツツ！！！」

「……………」

「オーイ、なにもそこまでヒクこと無いじゃんよ」

「あ

「申し訳御座いません、マスター」

ジーザス。なんか声かけた途端、世界陸上も真つ青なスピードで物影に隠れてしまった拳動不審なMY・メイドさん。

オレ何かした？

「そう、なら良いケドね」

まあ気にしないさ、ニンゲン誰しもツッコまれたくない妄想の1つや2つは抱えてるもんでしょ。

そうともさ。例え、瞳孔全開で出刃包丁逆手にハアハアしながらコッチにダツシユかけてきたとしても、なるたけ平静を形だけでも装う紳士的なオレ。

イヤ、べつに彼女がそういうキャラだ、って言ってるワケじゃないからね？

ただの比喻表現よ？

(そして然り気に溜息吐かれるっていう現実)

後ろに意識を向けると、なんかもう額に手まであてちゃってる始末

のMY・メイドさん。

あ、二発目。

「さっきまでの緊張感はどうしたんですか？」

「んんん？」

そう言われてもねえ、アレだしさ。

「シリアス嫌いだもん、オレ」

「　　そういう問題ですか？」

「　　そういう問題です」

イヤ、だって結構重要よ？コレ。

だって、真面目な空気　ふざけられないって事でしょ？オレの存在意義が無くなっちゃうじゃん！

「ハア」

あ、とうとう口に出した。

「ナニよーそんな『疲れました』みたいなテンション。幸せ逃げるぞ？」

「……………」

無視「シカト」ですか。

「……………ま、イイけどね」

ヒかれるのは慣れてるぞ。

取り敢えず今はこのペンキ塗りたくったみたいな深夜2時の街から一刻も早く抜け出したい気分。正直、ハンパない怖いのである。

軽くペースの上がる歩行、3歩後ろにピッタリついてくるオレの従者から、敵襲を知らせる合図はない。

夜風に、背負った栗色がフワリと揺れた。

(ビ、ビツクリした……………)

本当、この人はいつも、物凄く心臓に悪い。

毎度の事なのだが、いや毎度の事だからこそ、お願いだから突然目の前に現れるのは勘弁してほしい。

更に言えばそこから人の顔を覗き込むのはもっと勘弁してほしい。

その……すごく、ほとんど密着状態になってしまつので。

「

目の前のニンゲンは、まるで関係ないとも言うつように、鼻唄など歌いつつ軽やかにステップなど刻んでいる。

此方の気持ちなどまるで気付いてない………ことはないだろう、彼に限っては。

だとしたら気にしていないのだろうか。まあ、仮に進言したとしても改善されることはまず無い。

彼は、そういう人格「ニンゲン」だ。

「さっきまでの緊張感はどうしたんですか？」

「ん〜〜?」

覇気など微塵も感じさせないユルみ顔が振り向く。

まるで今ワタシに気付いたような反応だが、こういうのは素の反応なので特に気にしない。

気分はどうだと問われれば、上記の限りではないのだが。

「シリアス嫌いだもん、オレ」

「　　そういう問題ですか？」

「　　そういう問題です」

絶対に違うと思う。

「　　ハア」

まったく、自分が何をしているのかももう少し自覚して欲しいものだ。

「ナニよーそんな『疲れました』みたいなテンション。幸せ逃げる

ぞ？」

誰の所為だと思っているのか！

「……ま、イイけどね」

全然良くない。事後処理担当のワタシの立場になって欲しいものだ。

軽くペースの上がる彼の歩調。3歩分の間合いを崩さず、ワタシもほんの少し早足になる。

「でもさ、アレを始末した時点で既に大事でしょ？

もうーコくらい大して変わらないじゃん」

「意識の問題です」

「尚更心配ないさ。

こっに見えてしっかりしてる方よ？オレ」

首から上だけを此方に向け、いかにも優男な安売りの笑顔を見せてくる。キラリと不自然に光る歯茎、効果音が何処からともなく鳴り響く。

(……………まったく、この人は)

信用無いことこの上ない。この手の人間関係は彼は色々な意味で壊滅的だ。

「記憶消去の後、治療。落ちつき次第身元確認し送還します」

「万事オツケイだが」

「この件はワタシが全行程担当致しますので」

「……………
良いでしょオレがやっても」

絶対駄目。

連れ込む度にあんな事してるようでは本当にその類いのヒトになっ
てしまう。

流石にそれは遠慮したい、従者「ワタシ」自身の体面の為にも。

「だってさ、正直な話このまま『ハイ御仕舞い』なんて勿体無いジヤン?!」

反省どころか更に盛り上がってしまった。

うん、諦めよう。これ以上マスターの暴走「バカ」に付き合ってい
たらワタシの身が持たない。

視線を彼の背中に向ける。

泣きつかれたのか、緊張の糸が切れたのか、恐らくその両方だろう、
彼が背負っている栗色の髪は、スヤスヤと寝息を立てている。

さて、これから大変だな。

さて、少し整理をしようか。

ミシ ミシ ミシ ミシ

今日は普段に増して忙しかったり、これといった用事などがある日ではない。

国民的にも個人的にも記念日なんかじゃ断じてない。いたって普通の休日である。

衛宮邸でまったり日向ぼっこでもしつつ気分転換に緑茶でも啜ろうか、なんていう”いかにも”って感じの余暇の過ごし方もたまには良いだろうか。

なんてことを朝起きたて30分、まだ起動しきっていないアタマで

考えていただけなのである。

ミシ ミシ ミシ ミシ ミシ

日々のツケ、って言えばそういう節が思い当たらなくもないが。それにしたって比重が物凄い狂っているというか、片寄っている気がするのは気のせい。

だなんてシャレにならないジョークが口をつくような精神状態でもなくて。

ミシミシミシミシミシミ

まあ、一言に表すとだ。

「苦・多・刃・煉（クタバレ）」

ボグッ

「なぜ私を殴る?!」

自分でも惚れ惚れするくらい見事なクリティカルなヒットを記録したわたし、遠坂凜の渾身の右ストレートは、何故か偶然にも近場で待機していた執事「サーヴァント」三騎士が1人。

最近、クラス名を変えようかな？と地味に本気で悩んでいるアーチヤーさん、その人である。

の鳩尾に吸い込まれるように会心の一撃。

ボキッ

同時に、さっきから同じく壊滅的な音をたてていたボールペンがとととう臨界突破。

細かなプラスチック片を撒き散らしつつ、きっかり中心から真っ二つになったお値段89円税込の筆記用具は、ついさっき掃除したてフサフサな赤絨毯の上に見るも無惨に転がった。

うん。あとでもう一回掃除させよう。

「……………で？どんな面倒事を押し付けられた。

君があそこまで狼狽するのだ、生半可な命令ではないのだろうか？

……………『思わず』、他人の人体急所を的確に殴り付ける程の「

「悪かったって言ってるじゃない」

「悪いですむなら司法機関はいらん！」

「なによ、あんたサーヴァントでしょ？！英雄でしょ？！

悩める乙女の八つ当たりくらい笑って受け止めなさい！！」

「限度があるだろう！」

”強化”されたノーモーション右ストレートを腹にくらって、それでも笑みが浮かぶなど最早変態の域だ！”

「マスターの為なら変態の1つや2つくらい身に付けて当然でしょう……！」

「全力で断る……！」

ハア ハア ハア

何時ぞや、彼女の性格について一言溢した事がある。

確か、『その性格は近いうちに矯正するべきだな』、だったか。

前言撤回しよう。

『今すぐに”矯正するべき”だ。

……埒が明かん。話を戻すぞマスター。
で？その書類にはなんと書いてある」

額に皺を寄せ軽く唸りながらこちらを睨み付けてくる我が主。

こうして見れば、何処にでもいる普通の少女だな。と、らしくない感傷が一瞬過った。

カット、それは”オレ”の領域「シゴト」ではない。選んで来た選択肢にそんなカテゴリーは存在しない。

私の名前は、”アーチャー”だ。その行動は、”エミヤシロウ”であることを棄てた私には許されない。

「分かった。じゃあ話すけど、わたしに文句つけないでよね。

正直、わたしもアタマの中ぐちゃぐちゃなんだから」

「これでも理不尽への耐性はある、ましてや君に八つ当たりなぞする訳がなからう。

で、何が起こった？」

「……………」

……本当に何があったのか。先程からまるで彼女らしくない。普段の生活ならいざ知らず、コチラ側の人間としての遠坂凜はもっと釈

然としているはずだ。

相当大事なのか。と、私なりに想像を巡らせていた、その時。

「……………チヨモランマ山一帯で開催される、”本物の聖杯”を掛けた聖杯戦争への招待状が、ウチの大師父の名前で届いたわ」

不覚にも、一時正気を失った。

「……………なんでぞ」

皆さんはじめまして。

わたし、”弓塚 さつき”と申します。高校2年生です。

年齢的にはもう3年生になってる頃なんですけど、諸事情諸々あって、少し学校をお休みしていました。

今年の春に久しぶりに学校に行きました。ですから、高校2年生です。

行った学校は、前の学校とは違うところなんですけど、優しい友達に出会って、そこから色々お話したり、遊びに行ったりして、もうすっかり元通り。

むしろ前の学校の時より良いんじゃないか、ってくらい楽しみです。

楽しみなんですけど

「何考えてんだあの耄碌ジジイ!!」

ビクッ

(な……なに?)

今の流れからは全く関係ないんですが。

只今、ピンチです。

(わ……わたし、なにか悪い事した?)

玄関を開けたとたん、耳がキーンってなるくらいの怒鳴り声。

わたしが彼といっしょに暮らしはじめて一年くらい経つけど、こんな大声で怒られるのは初めてだ。

こんなふうに行ったら失礼だけど、最初に出会った頃のイメージからは考えられないくらい。

もう冗談抜きで、ああ『正義の味方』ってきつとこの人みたいなものなんだろうなあ、とか出会った当初は思っていた。

正直物凄く優しく格好良く、助けられたわたしは嬉しくて、助けられるまでが怖くて、不安で。

その時はずいぶん泣いてしまった。でも仕方ないと思う。あんな状況になったら男の人でも泣くと思うし。

まあ要約すると、とにかくカツコよかったのだ。

この一年でイメージはずいぶん様変わり。

ああ、『ダメ人間』ってきつとこの人みたいなものなんだろうな、などと最近は思っただけやみません。

……わたしのキャラじゃない。とかツツコミ入れたそのあなた、いっぺん彼とお友達になっただけでみてください。

『3ヶ月も付き合っただけで段々剥がれるからさ、化けの皮』

とは他ならぬ彼自身の談で、わたしはそれにまんまと引っかかっただけなのである。だからそんな目でわたしを見ないでお願い！

ちなみに、わたしのときはその六分の一で剥がれました、化けの皮。

(……………はぁ)

やめた。現実逃避おわり。流石にこれ以上扉開けっ放しなのはよろしくないだろう。

と言っか、あのまま放置しておくとか何か起きそうで怖い。

「……………ただいまー」

なんとかなるだろう。わたしは意を決して中に入る事にした。

1・『響き渡る哨戒』（後書き）

えー、やってしまいました。SSに目覚め、サイトを回りまくり、沸き立つ創作意欲を必死こいて抑えつけること数年。ついにやってしまいました。邪気眼全開な厨二展開が延々と続く駄文ですが、生ぬるいマナザシで見守ってくれたなら幸いです。

2・『真名吐露』(前書き)

一面に散らばる、肉片と石片。

町並みは廃墟となり、もう数時間前の面影はない。

その中で確かに見た。

巻き込まれ、全てを失くした人たちが。

無事を祝い喜ぶ姿を。

ギイイイ

後ろで、教会「オウチ」の扉が閉まる音がした。

カツン

甲高く、靴底の反響が聖堂に吸い込まれていく。

初めてここに来たときは、もう凄くビックリした。

三咲町には教会なんて無かったから、その反動も手伝ってか、軽い
放心状態になってしまったのは記憶に新しい。

……あれ、三咲町には無かったかな？なんか見たことあるような気がしたんだけど、あれ？

……気のせいだよ。お伽噺に出てくるような神さまの家なんて見たことあるわけないもん。

ましてや中に入ったことなんて尚更だ。だから、ここに最初にきたときは、もう凄くビックリして、そしたらいきなり彼が

『ジス イズ 我が家』

……いつも通りのよく分からない冗談かと、最初思った。

ああ、わたしを驚かせようとしてるのか。なんて考えてるうちに、いつの間にか出てきた神父さんとお喋りしながらさっさと入っていった。しまった彼。

隣では、彼付きのメイドさんが、やっぱりわたしと同じように放心状態になっていた。

その後、いつまでも教会に入っていないわたし達を神父さんが迎え

にきてくれて、恐縮しながらお部屋に通された瞬間、ワイン片手に彼に大笑いされて彼女がブチッといったのは別の話。

カツ　カツ　カツ

そういえば、家の中に入ってからしばらくたつのに”彼女”を見かけない。

この時間帯、いつもなら聖堂でオルガンを弾いているから、帰って来れば真っ先に会うはずなのに。

首を捻りながら考える。と、不意に。

「オウ、嬢ちゃんじゃねえか」

珍しい人に、声をかけられた。

「ランサーさん」

声のした方に振り返ってみる。

中庭の右端の、向日葵の花　彼いわく、”いつの間にか咲いてた不届き者”　の前に、ジヨウ口を持った、青髪の背の高い男性を見つけた。

「お帰りなさい」

取り敢えず手を振ってから、近くまで来てみる。あっちも手を振り返してくれて、それから気さくそんな笑みをこちらに向けた。

「でも、どうしたんですか？ランサーさん。

この時間バイトがあるって、前に言っていましたよね？」

うん、その辺が珍しい。

ランサーさんって、いろんな所でバイトしてて、普段は夜にならな
いと帰って来ないから。

「お、覚えててくれたのか。嬉しいねえ」

つてもまあ、今日はたまたま休みが重なっただけなんだがな。

そう付け足してから、ランサーさんはまた快活な笑顔をつかべた。

「嬢ちゃんはいま帰りかい？」

「はい。ちょっと友達といっしょに寄り道して、それから真っ直ぐここまで」

そんな当たり障りない話を、5分くらいしていると、突然。

ガスン

どことなくイヤな感じの音が聞こえてきた。

ランサーさんは、苦笑いのような、どこかホツとしたような表情。

「あの……ランサーさん？どうしたんですか？」

何かあったのか聞いてみると、さっきの、妙に疲れた苦笑いのまま、無言で1つの扉を指差して。

「ああ、帰っていたのですね、さっき」

示しあわせたように、さっきまで探していた”彼女”が、その扉を開けていた。

「
フウ」

取り敢えず、これで静かにはなった。いつもの事とはいえ本当少しは自重してもらえないだろうか。 もらえないだろうな。

「.....」

少々、過程に問題があるが気にしないでおこつ。

この程度で昇天するほど、我が主「マスター」は弱くはないと信じながら、時折丘に上げられた魚のように跳ねる彼を後ろに神父室のドアを開ける。

「ああ、帰っていたのですね、さつき」

開けてすぐに、この家の最後の住人を見つけた。

「あ、えと、ええと」

少し驚かせてしまったようだ。さつきの方はアタフタしている。

たつぷり6秒ほど間を開けて息を整えてから、彼女はいつもの朗らかな笑顔で挨拶を返してくれた。

……うん。やっぱり、さつきの笑顔は元気になる。癒されると言っただ方がこの場合は適当か。

彼女とは、一年近い付き合いになる。出会った当初は……いや、わざわざ彼女の傷を抉るような思考はよそう。例えばつきに知られなくとも、やっぱり触れてほしくないだろうから。

ともかく色々あったのだ。色々あって、彼女はそれを乗り越えて、沢山の意味で、彼女は強くなった。

その、身につけた強さの1つがさっきの笑顔。見るものを癒す、日溜まりの暖かさ。

仕事に追われて　主に彼のお守りなのだが　疲れた心を解してくれるのは、大半が彼女だった。

「礼拝堂にいなかったから心配しちゃったよ。
なにかあったの？」

こんな感じで首を傾げる所も個人的に高ポイント。少しワタシの背が高いか彼女が低ければ『上目遣い』という項目もプラスされたのだが、生憎ワタシとさっきの身長は横並び。実に残念である。牛乳飲もうかな？

思考中断「カット」。

(なにを暴走しているのか、ワタシは)

うん、危ない。このままではなにか変な誤解を受けるやもしれん。充電は完了。自重するんだワタシ。視界の外にはそわそわしているさつきの姿。

本当、何をしているのだ、ワタシ。

「……………申し訳ありません。少々考え事をしていました」

そういえば、何があったのか聞かれていた事を頭を下げながら思い出す。疲れているな、ワタシ。

無言で背後の扉を指差す。

彼女はまだ不思議そうだ。この教会でトラブルの元など、ひとつしかないと思うが。

「……………彼です」

それで気付いたのだろう。さつきは頭の上に豆電球を光らせてから、呆れたような表情で中に入り。

彼を呼ぶ声を、小さく響き渡らせた。

「……………イタイ」

イタイ、もう凄く痛い。具体的には身体中ビクンビクン痙攣するくらいイタイ。

今月に入って最初のトリップをカマしてました所、突如後ろから会

心の一撃が不意打ちで直接攻撃。

一拍遅れて後頭部が、ともすればコレ粉碎してんじゃねえ？ってな
くらの激痛を脳みそに向け発信。薄れゆく意識の中、視界の端に
はメガネレンズをキラリと光らすメイド服。

お……おのれ、謀ったな

……なんとか収まってきたぜ。

「もう、いったい今度はなにしたの？ク

」

ギィィ、と扉が開く音。それと同時に、何やら聞き覚えのある声が
する。

「き……きゃああああー……！！！！

やりすぎ、これはちよっとやりすぎだよアリエルー……！！」

ワザとらしく擬音入りでメガネを整えるメイド服のこの女。名前を『アリエル・スノウリウム』という。

詳しくは後ほど。っていうか自分の御主人様を平然と三途の川までブツ飛ばす不屈き者に解説なぞしてやる謂れはねエ！

「ええつと……大丈夫？」

左側には膝をつきながらオレの頭に治癒魔術をかけてくれる栗髪ツインテの美少女。

ああ、流石は我らがヒロイン弓塚さつちー。ありがとう、オレのと本気で心配してくれてんの多分キミだけだ

「あいわかった。今度さつちんに江戸前屋のどら焼きをおごってあげよう。

3年分ほど」

「そんなに食べれないよ………」

少々ハニカミながらやんわりと却下された。チクシヨウ、グレてや

る。

ネガティブオウラを纏いながら床に高速で”の”の字を書きまくる。
さあ新記録に挑戦だ、今日は1分間に何回出来るかな

「それで。

いつまでふざけているつもりですか？」

ヤロウ、自分のやった事棚にあげがった。何てやつだこのメイドSM「クイーン」め！だが決して声には出さない、まだ死にたくないモンね！

……なんか殺気が一段とスゴくなった気がする。

鬼気迫る感じでオレのオウラを掻き消す藍色メイド服。いつにもまして立っている気を菜野「サイヤ」の人が如くたぎらせている。

まったく、だからシリアスは嫌いだと言っておるに。個人的にもちっとバカやりたかったのだがもう一回凶器攻撃食らうのは御免。

と、いうワケで、続く。

「……いや、毎度毎度懲りないねえ」

背もたれにした開きっぱなしのドアに体重をかける。

ギィ、と木材が軋む音。

この光景。アイツが馬鹿をやって、付き人の姉ちゃんにシバき倒される一連の流れは、アイツらがこの教会に住むようになってからそれこそ厭きるほど繰り返され、すっかり刷り込まれた日常の風景だ。

昨日までなら、あそこに言峰の後釜「ディーロ」が入って焚き付け役なり仲裁なりやっていたのだが、生憎昨日で本職に戻りにいった。栗色の髪の嬢ちゃんは友達といっしょに大泣きしてたな。なんてことも同時に思い出して、まあ嬢ちゃんだからな、などと妙に納得した。

(そついや、アイツはいなかったよな)

ふと、いつにも増して大騒ぎだった会場に、アイツの音が響かなかったことを思い出す。

たしか前日からだ。急に仕事が入ったとかで出て行って、アイツだけ見送りには出れなかった。

「……………で、帰って来るなりこれか。本当、ワケ分からん奴だねえ、まったく」

大体素性からして謎だらけだ。なんだよ国防省勤務で教会の司祭で秘密結社の幹部で学生って。

ま、全部非常勤ってのはアイツらしいっちゃアイツらしい。

が、一番最後のやつは嘘くせえ。アイツのツラは形はともかくとして未成年のもんじゃない。サバ読んでるんじゃないかねえか？オイ。

っていつか、司祭や国防に非常勤って有るのか？学生には無いな。よし、やはり一番最後は信用しないことにしよう。

「……名前聞いたときは本気でビビったがな」

思わず、ゲイ・ボルクを取り出したくらいだ。まさか、もう一度その名を名乗られるとは思わなかったからな。

他のメンツがいつしよにいたら心がひとつにまとまっていたやもしれん。奴のもとに。

「ま、オヤジよか嫌な奴じゃないのが救いつちゃ救いか。

これで性格同じ。ってのだったら真つ先に逃げ出してるぜ」

……まあ、ヒネクレ具合やブツ飛び加減はあのヤロウといい勝負。ってところは問題だが。

「お、止まった」

ピタリ、と。断続的に続いていた騒音がなくなった。途端、一気に空気が変わる。

急転直下。正しく雰囲気は花畑から海底の冷たさ、重苦しさへと変質し、殺気にも似た眼光がこの場の全員を捕らえる。

この変わりよう。普段の素行はてんで似ても似つかぬくせにこういうトコロはしっかり受け継いでやがる。

暢気からシリアスへの切り替えスピードも相まって、まるで豹変したかの如く。

大抵、こういう時は何かしら厄介事があったときなんだが。さて、今度はいったい何があるのか。

「何にせよ、なるだけ面倒にならないと良いけどな」

「それで。」

「いつまでふざけているつもりですか？」

さっきから本題に入る様子などまるで見えない我が主に向けてこれでもかというくらいの殺気を飛ばす。

流石に我慢の限界だ。これ以上話が脱線するなら実力行使、具体的には頭部目掛けて踵落とし一発または金属バットでフルスイング、などもやむなし。

仕事や厄介事は迅速に当るのがワタシの主義。放って置いても百害有って一利無し。不穩の芽は早く摘み取るに越したことはないのだ。

だから早々と何が起きたかハナセ。あんまチンタラやってるとマジ

でシバくぞコラ、アア？

失礼。少々出過ぎました。

「……オーケー、まあどのみち話さんワケにもいかんし？報告しようじゃないか」

目の前に座り込んだ彼は欠伸混じりにそう言うと、衣服についた塵を払いながら立ち上がる。

片方だけ飛んでいったサンダルを片足で器用にテーブルの下から引っ張った後、首から上だけを入口の扉に向けた。

「そこで突っ立ってるキミにもご清聴願う。少なからず、っていうか多分に関わりあるだろうから」

その声を掛けられた本人　ランサーは、5秒ほどの空きを取ってからゆっくりと此方に歩み寄る。

彼なりに事の大きさを悟ったのだろう。普段の素行はなりを潜め、身に纏う空気は限りなく戦場のそれに近い。

部屋の中央の円卓に、この家の住人全員が集う。

「手短に行くぞ。途中の私語は禁止。質問は最後に受け付ける。

届いたのは寶石翁名義での聖杯戦争の告知。

参加資格は告知状の有無。付属した書類に必要な事項を記入し、期日までに提出した者のみ参加が認められる。

主な開催地はチヨモランマ山一帯の魔術協会の管轄地域。

主なルールは以下の通り。

- ・原則として魔術以外の技術の使用は認めない。
- ・聖杯戦争中の各参加者同士の協力も基本的に認めない。
- ・聖杯戦争中は魔術を隠匿する必要はない。

以下、詳細については参加表明の確認後、追って通達される。

……………以上だ、何か質問は？」

「……………はっ?!」

いけない、なんか唐突すぎて途中からよく聞けなかったよ。

(聖杯戦争って……ランサーさんがこっちに呼ばれた原因になった戦いだよね)

その戦いがチヨモランマ……エベレストで始まるから、招待状が届いて、それで

「えっと、参加するの?」

そうだ。たしかそんな話だったはず。

「……………どうしようかねえ」

え?

「……………参加しないの?」

「なんだ、出てほしいのか？」

天井をじっと眺めていた彼の顔が、すぐ正面に座っているわたしの方を向く。

「そういうわけじゃないんだけど……」

「こづいつの好きでしょ？すごい乗り気になると思ってたから」

うん、だから意外。いつもなら本当に小躍りしながら喜ぶのに。なんかすごくテンションダウンしてる。

「否定はしないけどな。」

「だがなんと言つか、胡散臭い」

「この戦いが？」

「正確には名義人のほう。」

あのヤロウが出てくると色々面倒になるし、そもそもヤツが関わって良い思いをした試しがない」

「魔術師の間でも、相当な変人で通っていますから。」

加えてマスターは何度か面識があり、実際にその”面倒な事”に捲き込まれた事もあるようです」

彼の左隣に待機していたアリエルが補足をいれる。心なしか、口元が緩んでいる気がした。

「アリエルは会ったことあるの？」

「一度だけ、ですが」

語る表情はやっぱり嬉しそうだ。でも隣の彼は嫌な顔してるし、どつちなんだろう。

「話を戻すぞ。」

提出期限まではけっこう時間があるから、いまずぐ決めなきゃならんワケじゃない。

で、一通り意見を聞きたいんだが……アリエルからどうぞ」

「率直に申し上げれば、反対です」

さっきのどこか嬉しそうな雰囲気とは一転、ずばつと切り捨てたアリエル。彼もこの辺り予想していたのか、別段気にした様子はない。

次はわたしの番だけど……

「わたしも、反対かな。」

あんまり危ないこととしてほしくないから」

ごめんね。と言葉を続けて、謝る。戦って、彼が負けるとは思えないけど、やっぱり心配だから。

「ランサーはどうだ？」

最後、わたしの左側に立って静観していたランサーさんに視線が集まる。少しだけ、目をつむって考えたあと。

「別にオレはどちらでも良いぜ。聖杯に興味なんざねえが戦いには興味ある。」

やらねえでも文句はない。が、やるんだったらオレも連れていけ。
まあ、それだけだ」

どちらにも着かず。意見は反対2、中立1という結果になった。

「オーケー、取り敢えずは反対優勢だな。」

……まあ正直なハナシ、オレもどっちでも良いんだが」

そう言った途端、テーブルの上にノツペリと伏せってしまった彼。

シリアス成分枯渇だぜ。なんて言いながら、ゴロゴロと右へ左へ半回転。思わず苦笑いしてしまった。

そして唐突に、家に帰ってすぐに聞こえてきた、あの大声を思い出す。

「もしかして、少し前に大きな声で怒ってたのって……これが原因？」

ピタッと彼の動きが止まる。姿勢は仰向け、100人ス スな映画に出てくるあのポーズみないな体制のまま首を縦に振る。

よかった、わたしの勘違いだったみたい。

ホツと胸を撫で下ろす。不思議そうに首を捻る彼にその経緯を説明すると、『流石にそれは無い』と、微笑いながら納得していた。

……もうちょっとマトモな姿勢なら、カッコよかったんだけどな。

「
」

闇に浮かんだ月輪は、ひどく幻想的だ。

深夜、世界から光と色が消えてなくなる時間。淡く燐光を纏う正円
以外に、いま、空を彩るものは何も無い。

文字通り、吸い込まれそうな風景。

布越しに伝わる椅子の質感も、肌を刺す夜の冷気も、確かに神経が捉えているのに、脳が実感することを拒否している。

月明かりは人を狂わす、か。ああ認めよう。事実、疑うまでもなくトバされてる奴がココにいる。

シリアスはクライだが、quietness「セイジャク」は嫌じゃない。

いつもバカをやってる反動なのか、1日1回はこんな風に、独りきりになりたくなる。

バカをやってる反動なのか。

……単に、”あの日”から逃げたいだけなのか、本当は判らないのだけ。

頭の中で、ボンヤリと浮かび上がり重なる、今の風景とは正反対の光景。

一面の赤。充滿する炎熱。煤けた自分の体。焦げきった周りのカタチ、モノ、ヒト、あの高いソラですら。

涙すら灼き払う空間。

……正常「ニンゲン」の頃の最後の記憶。最後に見た、この世の地獄。

10年前のあの痛みは。

（　　ッ　　）

今も、焼き付いて消えることはない。

「……だから、シリアスはキライなんだってば」

その全てをカットする。流石にコレ以上はキャラじゃない。暗躍とバカパートがオレの領分。シリアスなんて大ツ嫌いだ。

ゴスッ

取り敢えず側頭部に正拳一発。力加減ミスった、ヤベエぐらぐらする。

でもまあ、ガラじゃない思考もフツ飛んでくれた。

「ハア、ヤメた。萎えた、なんかモノ凄く萎えた。

萎えたので今日のおさらいをしようと思っ」

脈絡無えとかのツツコミは一切受け付けない。ちなみに現在時刻午後10時、所は言峰教会中庭。

ってなワケでおさらい開始。

色々あつて今に至る。以上。

……ああ、やっぱり気分じゃないわ。ヤメた、おさらいもヤメ。こんな時は寝るに限るが部屋まで帰るのもめんどくさい。どーしようかなー。

カサカサ

「ム？」

突然、背後の茂みが不振な音を。敵か、敵なのか。血沸き肉躍るイヴェント戦なのか？！

「スキ有りい！！！！」

オレ的必殺コ・ブ・ラ・ツ・イ・ス・トオオオ！！！！」

「きゃあああ？！」

思考 実行まで0.3秒。振り向き様ル ンダイブの後、コアラの如く目標に絡みつき敵ごと転倒し、そのまま即座にスリーパーホー

ルドの体制に移行。

ん？ドコにもコブラが含まれてない？ハ、関係ないZ E！

全身ガツチリとロックした上に喉元にはキッチンから掻っ払ったスプーンが一本。フハハハハ、完璧だ。最早何もできまい行えまい。

「言え、言つんだ、早く言ええええー！！！」

某・蛇の人を参考に尋問開始。目的はなんだ、北の国からオレに独占インタビューか？殺人メイドに弟子入り志願か？それともランサーと『やらないか』か？『やらないか』なのかアアア！?!？

「え？ええ？！」

そうかキサマ！我らがさっちんのあられもない姿を狙うストーカーだな！？着替え中とかバスタイムとか便座カバーとかをカメラに収めるつもりだな？！

まさか……実はもう任務完了なのか？ファインダー越しにバツチリなのか？そいつはドコにある？！そいつをコツチに寄越せエー！！！！

.....え？

「もしかして 本人？」

「えっと.....うん、そうだと思う」

.....マジ？

「判った。落ち着け、ビークウルだ。真面目なハナシをしようじゃないか。

で、何でまたさっちはこんな所に？」

この場合、落ち着くのはオレの方な気がしなくもないがそんなの力ンケーねえ。

しきりに首を捻るさっちん。ショックで度忘れしたか？ちよっぴり罪悪感。

ん？なんでスプーンなのかって？決まってるじゃないか、スプーン曲げの練習をしてたからさー！！

……いやね、夕飯食ってたらいきなりね、ゴッドからの御告げが脳内にスパークしてね、気付いたらやってたのよ。後悔はしていない。開始10分で飽きたからな。

で、そのまま月見に移行し、センチメンタルになったので1曲熱唱し、それも飽きたからボンヤリしてて今に至るワケ。

………今更だが、聴かれてないよな？

「えっと、アリエルの部屋に行こうとしたら、中庭から声が聞こえてきて、誰かな？って思って、それで来てみたんだけど……」

フアアツク！！

ヤベエ聴かれてた。ちょ、モノ凄ハズいんだけど！どうするオレ、どうするよオレ！…

「ねえ、どうしたの？」

ああ、その純粹無垢な瞳が痛すぎる。見るな、そんな目でオレを見るなあー！！

「……あの日の事を、思い出していたのさ」

効果音付きで憂いのフェイスを偽造「ツク」りだし、更には左手で髪を掻き揚げてみる。よし、完璧。コレでため息と共に歌に関するコメントもグッバイだぜ……！！

「あの日のこと？」

ヤベエ、食いついちゃった。

「もしかして、さっき聴こえてた歌と、関係あるの？」

しかもコメント回避失敗！マジでどうするよオレ！ゴリ押しか？もうゴリ押ししかないのか？

「悪いな。まだ、打ち明ける勇気が無いんだ」

「……そうなんだ」

よし、今度は上手くいったろ。あのレベルの誤魔化しに食い付くなら多少強引にエスケープしても問題は

「でも、心配だよ」

手強いな。

「力になりたいよ。わたしのことだって、いっぱい助けてくれたんだもん。」

……だから、今度はわたしが助けてあげたい」

そして、なんか本格的に罪悪感湧いてきたな。

「ありがとう。でも、ゴメンな？」

これはオレの問題だから、オレの力だけで解決しなきゃいけないんだ……」

海底みたく重苦しくなってしまった雰囲気から、なんとか脱出しようと試みるが。

「そんなことない!!」

……ますます泥沼化してしまう。ああ、胃袋がキリキリ痛む。バラそうかな、もう全部ゲロって楽になっちゃおうかな。っていうかコレ以上は收拾どころか以後の人間関係すらおぼつかなくなりそうで

不安。よし、ゲロしよう。

「あー、さつき？あのさ……………」

「何をしてらっしゃるのですか？」

その時、突如第三者介入イベント発生。視線を向ければそこには藍色のメイド服を纏うメガネっ娘。

「茂みの中に連れ込んだ上に嫌がるさつきを後ろから羽交い締め。

「いったいどういうつもりで？」

サンキューアリエル！！主にタイミング的にナイスだ……………ぜ？

「あー……………つまり、ドユコト？」

「ご自分の胸に手をあてて聞いてみたらどうでしょう？」

……………まあ、聞く暇など与えませんが」

言われた通りに胸に手をあてようとして

「あ、あははは……………」

ようやく、今の自分の体制に気がついた。

どんな体制かというとアリエルが言ったそのままの体制。

ヤッベエ、オレ的必殺コブラツイスト掛けたままだったー！？！

「判った。落ち着け、ピークウルだ。真面目なハナシをしようじゃ

……………」

「問・答・無・用」

ボグッ

「御無事ですかさつき？」

どこか痛む所は？気分が優れないようなら直ぐに言いつけて下さい。

何か物を盗られたとか、暴行を受けたとか、そういった事は有りませんでしたか？怖がらずに話して下さいね、直ぐ様天誅を下しますから。

ああ、それとも……………」

「と、とりあえず落ち着こう？アリエル。

わたしはダイジョブだから」

普通のクールはどこへやら。目の前のアリエルは今までに無いくらい取り乱している。

右手にはいつの間に出したのか、大きな棘がいくつもついた棍棒が握られている。

このままなら間違いなくすぐその茂みでビクンビクンしてる彼に向かつて降り下ろされること間違いなし。

それは色々とまずいので何とかアリエルに説得を試みるものの。

「これが落ち着いてなどいられますか?! よりによってあの男に襲われたのですよ、自覚しているのですかさつき!」

「だから襲われてないってば〜」

まあ他の人が見れば間違いなくそう思うだろうが、彼についてはあのくらいは日常茶飯事。

それこそ挨拶代わりのように色々とやってくるものだから、わたしもアリエルも慣れてしまっている。

でも何故か今回は焼け石に水というか、アリエルはまったく取り合ってくれない。なんかますますヒートアップしてる。どうしたんだろう、アリエル?

「かさつきが汚されたかさつきが汚されたかさつきが汚されたかさつきが汚されたかさつきが汚されたかさつきが汚されたかさつきが汚されたかさつきが……」

(ホントにどうしたのリエル?!今回はなんか変だよ?!?)

そしてまたいつの間に出したのか、左手にはスゴく大きな鎌が。もしかしてリエル本気で殺そうとしている?

「心底見損ないましたマスター。もう貴方のような蛆虫には彼女は任せられません。」

さつきは、ワタシが責任をもってお世話させていただきま

す。貴方はもう必要ありません。さあ、何処へなりと、消えて下さい」

そしてそのまま幽鬼のようにフラフラと彼に歩み寄るリエル。

本格的にマズいかも。

「ちょっと待って!さすがにソレは駄目だつて!」

大慌てでリエルを静止にかかるわたし。

「何をするのですか!こんな男に情を掛ける必要などありません、さつき!」

いまにも彼目掛けて鎌を降り下ろしそうなアリエルの両手をつかんで引き離す。

彼の姿が見えなくなるまで距離をとってから説明、開始。

いつになくヒートアップしてるアリエルに説明するのはものすごい大変そうんだけど、ここで引いたら死人が出てしまう。

「様子を見に来たら行き成り飛び掛かってきた？情状酌量の余地無しではないですか。

やはりこの手で制裁を……………」

「だから違うんだよ、最後まで聞いて〜」

結局、アリエルが武器をしまったのは説得から30分後だった。

（ 疲れたよお ）

そして今現在、彼が気絶し倒れている中庭まで移動中。

今日はいつにも増して精神的に疲れてしまった。だが周囲に注意を

向けるのは忘れない。もし彼が快復していた場合、闇に紛れてわたし目掛けて飛び掛かって来るかもしれないからだ。

……うん、わたしも最初の頃はどうかと思ってたけど、この辺も慣れてしまった。

理不尽さは拭いきれないけど。

なんで自分の家で怪我人の様子を確認するのにこんなに殺伐としなきゃいけないのだろうか。でもコシを怠ると被害にあうのはコツチだ。

そろそろ足音をたてないように、ゆっくりと中庭目指して進む。いつもの1/5くらいの速度で歩み寄って、ようやく彼の姿がしっかりと確認できるまでに近づいた。

しかし油断は禁物。もしかしたら、あそこで倒れてる彼はケフィアが異常なほどつめられた風船「ニセモノ」かもしれない。一回引っかかったことがある以上、この教訓を活かさなければわたしはただバカをみただけになってしまう。

ガチャ

すぐ目の前の彼の自室から、長棒をもってくる。

ランサーさんとの試合で使うやつだ。実際に見たのは2〜3回くらいだったけど、スゴくハイレベルな戦いだったことは覚えている。

(……………えい)

とりあえずつついてみた。

ゴリつとした感触が棒越しに伝わってくる。骨に当たったようだ。……………痛かったかな。

他にもいろんなトコを確かめてみたが、特に変なところはないみたいだ。……………まだ不信感はあるのだけど、もしホンモノだったら色々大変である。

長棒を部屋に戻して、それからそろそろと近づいていく。

(…あ)

本当に、彼は眠っていた。

心地よさそうにスヤスヤと寝息を立てている。念のために傷口に治癒を掛けたけど、どこか痛むような素振りはない。

(……………はぁ)

途端、一気に脱力感がこみあげてきた。なんと言うか、さっきまで戦々恐々していた自分が馬鹿らしい。

(このまま放っておくのもマズいよね)

背中と腰に手を回して、それから一気に持ち上げる。見た目よりもガツシリとした身体は、思いのほか軽かった。

開け放していた、彼の部屋のドアに向き直る。一陣の風。薄い月明かりの下、石造りの廊下を駆け抜けたそれは、左右に纏めた栗色「ワタシ」の髪と、血を溢したような真紅「カレ」の髪を、同時に鋤いていった。

途端、思わず笑みが込みあげる。

お姫様だっこ、というフレーズから、何故か知らないが彼が純白のドレスに身を包んでいる姿を連想してしまった。無い。いくら彼で

もそれは無い。だが真剣に想像するほど可笑しくて仕方ない。

(ぜったい似合わない……!!)

ああ、でももし本当に着たとしたらどんな顔をするだろう。童話のなかのプリンセスみたいに、お化粧して？ ネットクレスやティアラをつけて？ どこかのパーティー会場で？

彼の事だ、きつと途端に無口になるんだろう。『悪いが、オレに受け属性などない』なんて言って、困ったように微笑うんだ。

それともヤケになってお姫様になりきっちゃうのかな？ いきなりスゴい丁寧語になって、裾をつまんでお辞儀とかして うん、それも面白いかも。

「なんか、楽しいな。」

もう戻れないって思ったのに、またわたしは日常「ココ」で笑ってる。

すごく……すごく、楽しいよ」

ジワ、と視界が滲んだ。少しずつ少しずつ、瞼の裏から目尻に溜まり、一粒だけ頬を伝って流れていく。

気付けばもう、彼のベッドの前だった。

「……………」

わたしの腕のなかで眠るプリンセスは、まだ深く夢に潜っている。起きる気配は無い。そっと降ろして、それからゴシゴシと、涙で満ちた両目をこする。

行くう。

ギイイ

後ろ髪を引かれながら、部屋の外まで出た。暖かな彼の隣と比べて、この夜風は冷たすぎる。夏の夜にそぐわない乾いた空気と寒気の下、思わず自分で自分を抱きしめる。

閉じていく扉、あと数秒と掛からず無くなるだろう、僅かなスキマから覗く彼の横顔に、一言だけ、コトバをかけた。

「おやすみ、玖郎くん」

2・『真名吐露』(後書き)

えー、どうもすみません。

前回の更新から2ヶ月以上たってしまいました。恐らくこれからもこのペースでいくと思います。何分手が尋常じゃなく遅いもので……

『ああ、こんな有ったね』程度の気持ちでいいので、たまに見てくだされば幸いです。

それでわ……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6780h/>

Fate/Fade

2010年11月10日14時51分発行